

どのような年齢からでも遅くはない

東京大学名誉教授
月尾嘉男

七五にしてよつやく高齢

今年一月、日本老年学会と日本老年医学会が共同で高齢者の区分について提言した。六五歳から七四歳を准高齢者、七五歳から八九歳を高齢者、九〇歳以上を超高齢者と命名しようという内容である。各国で事情が相違するので、高齢者について世界共通の定義はないが、日本では二〇〇八年に後期高齢者医療制度を導入するときに六五歳から七四歳を前期高齢者、それ以上を後期高齢者

としたため、この名称が社会に浸透してきた。

今回の提言については、厚生年金の支給開始年齢を引上げる布石ではないかという憶測もあるが、最大の背景は平均寿命が急速に延長していることである。中国唐代の詩人杜甫の詩文「人生七十古来稀なり」から七〇歳は古稀とされるが、現在の日本では七〇歳男性の平均余命、すなわち今後何年生存できるかの年数が一六年、女性が二〇年であるから、七〇歳は高齢社会の入口程度でしか



ない。そこで課題は延長された人生の生き方である。

晩年から成功させた大事業

以下に四人の見習うべき人生を紹介

介したい。一九世紀初頭に正確な日本地図を作成した伊能忠敬は婿入りした伊能家を再興し、五〇歳で家督を長男に譲渡し隠居する。当時の平均寿命は三〇代中頃であるから、五〇歳というのは十分に長命である。そこから一念発起して天文学や測量学を習得、五六歳で日本列島の測量に出発、七〇歳までに全国の測量を終了する。すべて徒歩での移動という健脚で、死亡する七四歳まで地図の製作に没頭した。

苦境にある東芝の創業は一八七五年とされるが、創業者は一七九九年生まれの田中久重である。すでに二〇代でカラクリ人形を製作するほどの才能があったが、重要文化財に指定されている「万年自鳴鐘」という機械時計を製作したのは五二歳、実用になった国産最初の蒸気船「凌風丸」の建造責任者となったのが六六歳であり、明治維新とともに東京に移住し、七六歳のときに東芝の元祖となる田中製造所を設立している。東京都心には森ビルが林立しているが、この不動産開発業は一九〇四

年生まれの森泰吉郎が五一歳で創業している。戦後、横浜市立経済専門学校（現在の横浜市立大学）の教授となり、五四年から商学部長に就任していたが、翌年から不動産開発を手がけ、五六年に第一森ビルを竣工させた。五九年に五五歳で大学を辞任して専業となり、八六年までに七三棟の高層オフィスビルを建設し、当時の日本三位の不動産業に成長させている。

海外にも事例は存在する。現在では世界に約二万店が存在するケンタッキー・フライド・チキンは一八九〇年生まれのカネル・サンダースが四〇歳のときに自営のガソリンスタンドに併設したサンダース・カフェから出発した。三〇代前半までに四〇以上の職業を転々とするほど波瀾万丈の人生であったが、このカフェが大当たりとなり、店舗を増加させていき、六二歳のときに現在のフランチャイズ方式を実現した。

熟考すべき人生最後の二〇年

日本では定年が六五歳になりつつ

あるが、それでも前途には二〇年近い人生が待ち受けている。これを意義ある人生にする第一の要件は健康の維持である。世界保健機関が健康寿命を提唱している。医療や介護に継続して依存する年数を平均寿命から引き算した数字である。日本人の健康寿命は世界一位であるが、介護などに依存する不健康寿命の年数も世界一位である。これは医療財政の破綻に直結し、後継世代に迷惑をかけることになる。

第二の要件は次世代への貢献である。だれもが伊能忠敬や田中久重ほどの偉業はできないが、元気である期間に子孫に遺贈できることを実行すべきである。企業には利益の追求だけではなく、存在する社会への責任が要求されるのと同様、現在では人口の二七パーセント、五〇年後には四〇パーセントになる高齢者も生活する社会への責任を意識する必要がある。

各々が最後の二〇年の人生を熟慮することにより、日本は高齢社会の模範となることができる。